

Spontaneous trait associations and the case of the superstitious banana.

自発的特性連合と迷信深いバナナの例.

Brown, R. D., and Bassili, J. N. (2002) Spontaneous trait associations and the case of the superstitious banana. *Journal of Experimental Social Psychology*, 38, 87-92.

Rep. 小森めぐみ¹.

ABSTRACT

人間ではない無生物が特性をほのめかす行動の文脈に呈示された場合に自発的特性転移が起こるかが検討された。その結果、通常は特性を備えない無生物の物体（迷信深いバナナの連合）にも STT が生じ、プライムされた特性概念の連想可能性の広さが示された。この知見は STT で生じている特性の連合は対人知覚とは別であることを示している。この結果により、再学習パラダイムで検討されている連合プロセスのタイプにこの知見が与える影響が議論された。

はじめに

- STI (自発的特性推論) とは、特性をほのめかす行動情報と接触すると、意図や意識的な気づきなしに行われる推論である。
- 印象形成プロセスを検討した古典的研究 (e. g., Asch, 1946; Tagiuri, 1958) や帰属研究 (e. g., Jones & Davis, 1965; Kelly, 1967) では、STI は日常生活の社会機能の必要不可欠な部分を担っていると考えられていた。
- この人たちは、STI は explicit な特性推論と同様の認知プロセスを経ると考えていた
- 社会心理学における認知的手法の発達により、他者に関する推論が起きている兆候をつかむ方法が模索された
 - Winter and Uleman (1984) は手がかり再生パラダイムを使用して STI を検討
 - しかしその後の研究で、STI は行為者と連合したものなのか、行動をラベルづけた特性カテゴリーにすぎないのかが議論となった (Bassili, 1989, 1993; Higgins & Bargh, 1987; Whitney, Davis, & Waring, 1994)
- 上記の批判に対抗して、Carlston and Skowronski (1994) は特性推論を tacit な知識として概念化することを主張して、再学習パラダイム (Ebbinghaus (1885/1964) を用いた検討を行った。
 - 再学習パラダイム：数枚の写真と、行為者が特定の特性をほのめかすような自己記述の組み合わせが呈示された後、同じ写真と特性語の組み合わせが呈示される。ある特性語は事前に呈示された自己記述に対応しており、ある特性語は対応しない。その後、写真が呈示され、参加者はその写真と組み合わせられていた特性語を想起して答えた。自発的特性推論が生じていれば、対応する特性語は再学習されたことになり、記憶に残りやすくなる。
 - 再学習パラダイムは伝統的な explicit な再生・再認測度でははかれない暗黙的な記憶プロセスを検討できる (MacLeod, 1988; Nelson, 1985) ため、STI 研究むき
- Carlston and Skowronski (1994) は再学習パラダイムを用いた実験を複数行い、STI が生じていることを示した。
- また、事前に抱かれた処理目標は再学習効果に影響しなかった。これは STI が自動的な過程であることを示している。

¹ 一橋大学大学院博士課程

- Carlston, Skowronski, and Sparks(1995)は、傾向性推論が生じない状況における再学習の効果を検討した。
 - ここでは写真の人物が別の人物の行動を述べている記述を対呈示した。ここでも再学習効果は有意に見られた(これはSTT、自発的特性転移と呼ばれる)
- STTは、再学習効果で見られた行為者と特性の連合の少なくとも一部は、行為者の推論から生じたものでないことを示唆している。
- さらに、STTはSTIと同様、事前の処理目標が影響しない自動的な過程といえる
- Skowronski, Carlston, Mae and Crawford(1998)は、STIとSTTを比較して、前者のほうが効果が強いことを示している。
 - 参加者は、写真の人物が自分のこと/友だちのことの記述に目を通し(to familiarize)、2日後にその特性を評定させると、STIのほうがSTTよりも強く見られたほか、写真と記述のくみあわせはランダムだと教示された場合でも、同程度に生じることが示されている。
- 行為者が記述された行動をとったと教示された場合の行為者と特性の連合は、偶然の連合よりも強いと考えられる。Skowronski et al., (1998)はこの結果がexplicitな推論プロセスの影響と考えている。

THE PRESENT STUDY

- 本研究の目的は、行為者と特性をほのめかす情報と一緒に呈示される刺激が、通常は属性をもたないと考えられる物体であるときのSTTを検討すること。具体的には以下の二つ
 - STTが生じるのは、推論者が伝達者にも(他の人についての)伝達内容と類似した特性が備わっていると推論しているから、という代替説明
 - STIが生じるのは、推論者が、伝達者は自分が重要と思う特性に言及していると推論しているから、という代替説明
- 本研究のもう一つの目的は、対人知覚で得られている刺激と特性の連合がモノでも得られるかを検討する。これは、これらの連合は刺激に付いての推論プロセスなしでも生じるものだという仮説を検討することにあたる。

方法

実験参加者と実験計画

実験参加者：トロント大学スカボローキャンパスで入門心理学を受講している学生97名

実験条件：2(試行タイプ：再学習/統制)×3(手がかり：行為者、見物人、モノ)の2要因被験者内計画。

手続

- 実験手続はCarlston and Skowronski (1994)の再学習パラダイムと類似したもの
- 実験参加者は、ビデオモニターのある一人用に区切られたブースに座った。教示と刺激呈示はパソコンが制御した。
- 【接触フェイズ】参加者は見物人/モノと一緒に呈示された行為者が自己記述的な発言するところ

を呈示された。

- この段階で STI (→行為者) と STT (→見物人、モノ) の両方が生じうる
- ・ 【学習フェイズ】参加者は、人と特性の連合かモノと特性の連合を呈示され、それを暗記した。ペアのうちいくつかは、接触フェイズで呈示された行動記述文と対応していた (再学習試行)。残りのペアは、接触フェイズで呈示された個人や者が新しい特性とくみあわされた。
- ・ 【再生フェイズ】参加者は写真を見せられ、それがどの特性と組み合わせられていたかを答えた。

教示：実験参加者は実験が“社会的情報の処理に影響する一般的な要因”を検討していると説明された。実験参加者は、現実場面での他者の情報処理 (べつの人やモノをまきこんで行われる場合もある) を simulate するために、他者が自分について述べているところを別の人やモノと一緒に呈示されると伝えられた。

その後、実験者は典型的な接触課題を描いているポスターを提示し、それぞれの試行がどのように二人の人物や一人物とモノを呈示するかを説明した。参加者は後の実験フェイズと関連するからという理由で、すべての刺激に目を慣らした。

接触タスクは Carlston and Skowronski (1994) の “no-set” 条件をもととした。

カバーストーリーと教示は、どのフェイズにも重きを置かないような形で、より現実場面に近い形で説明された。

接触タスク：接触フェイズは顔二つ (同性) + 行動記述 または 顔一つモノ一つ + 行動記述という形で行われた。顔二つの場合、片方が自己記述的を行い、片方がそれを聞いているように描かれた。顔一つモノ一つの場合も刺激の定時位置は同じ

呈示されたモノは、通常であればパーソナリティ特性をもたないとされる物体 (野球帽、扇風機、缶、閃光、バナナ、カップ、本、計算機) であった。行為者の自己記述は Carlston et al., (1995) から抜き出され、行為者の写真から出る吹き出しの中に記述され、行為者自身についての記述であることが明らかだった。

混乱タスク：参加者の再生能力を阻害する為に、行動記述文 60 文が示された。そのうち 16 文は接触タスクで呈示された記述文と同じ特性をほのめかした。項目は二つずつ提示され、参加者はそれを 30 秒以内に両方読んで、どちらが好ましいかを評定した。写真はついていなかった。

学習タスク：学習タスクでは 24 の人と特性の組み合わせ、8 のモノと特性の組み合わせが呈示された。参加者はそれぞれに組み合わせられた特性を 6 秒で覚えるよう教示された。呈示された組み合わせのうち 16 は接触タスクで触れたものであり、残り 16 は初めて見るものだった。後者は統制試行

- ・ 参加者は二つのセットのうち一つに配置された。片方のセットで再学習試行となった特性語は、もう片方のセットでは統制試行となった。これにより、特定の試行の覚えやすさは統制された。
- ・ これら 32 試行にくわえて、手続の冒頭と最後 3 試行には、フィラー課題が含まれた。

フィラータスク：学習タスクの終了後、参加者は 4 分間有名人の名前をスクラブルして、potential recency effect を排除した。

手がかり再生タスク：学習タスクで使用された写真がランダムに呈示され、参加者はその写真と組み合わせられた特性語を答えた。思い出せない場合はあてずっぽうも許された。

RESULT

- 各参加者の正解数は2（試行）×3（手がかり）のANOVAにかけられた。
- 試行の主効果が見られ、再学習試行の正答割合（54.2%, SD=20.1）のほうが統制試行の正答割合（40.4%, SD=19.8）よりも有意に多かった（ $F(1, 96)=37.48, p<.001$ ）。
- 手がかりの主効果も見られ（ $F(2, 96)=10.35, p<.001$ ）、下位分析の結果、行為者と連合していた特性の正答割合と（48.7%, SD=19.5）、モノと連合していた特性の正答割合（50.6%, SD=24.0）が、見物人と連合していた特性の正答割合（41.1%, SD=21.7）を上回っていた（ $t(96)=4.27, p<.001, t(96)=3.67, p<.001$ ）。行為者とモノの間に有意差は見られなかった（ $t<1$ ）。
- 試行と手がかりの交互作用も有意だった（ $F(1, 96)=4.07, p<.02$ ）。再学習試行における手がかりの強さは、見物人（ $M=10.1\%, SD=34.0$ ）、モノよりも（ $M=7.5\%, SD=32.1$ ）、行為者（ $M=18.8\%, SD=25.3$ ）が強かった（ $t(96)=2.36, p<.05, \text{and } t(96)=3.00, p<.01$ ）。
- 上記の結果は、Skowronski et al (1998)で見られたSTT、STIよりも強かった。
- 見物人（ $t(96)=2.91, p<.01$ ）とモノ（ $t(96)=2.29, p<.05$ ）で生じていた学習の効果は有意であり、二つの間に違いは見られなかった。この結果は、STTが特性を備えないモノでも見られることを示している。
- 見物人がいるときの行為者手がかりの学習効果（ $M=21.6\%, SD=34.9$ ）と、モノがあるときの行為者手がかりの学習効果（ $M=16.0\%, SD=33.3$ ）の間には有意な差は見られなかった。

DISCUSSION

- 本研究では、行為者が見物人や特性をもたないモノと一緒にあって、特性をほのめかす行動記述文と呈示された場合の特性の連合を検討した。
- 特性をもたないモノに特性を推論することは非論理的であるため、本実験の結果は、STTが生じるのは、行為者以外の人物にも特性が推論されたからだという説明を棄却できるもの
- STTがモノにも生じるということは、再学習パラダイムで検討された特性の連合が刺激の推論なしでも生じるものであることを示唆している。
- Skowronski et al (1998)はSTIがSTTよりも強いのは、STTでは生じていない推論プロセスがSTIでは生じているからと考えている。本研究で見られた、見物人やモノとの特性の連合は、連合プロセスには二通り（行動記述文の文脈に含まれるentityすべてにあてはまるものと、行為者の属性を示唆するもの）あることをより明確に示している。
- また、本研究の結果は、特性の連合しやすさを示しており、STIは（STTと同様、）行動記述の分類の間に活性化した特性概念と、他の刺激（行為者、見物人、モノ）の作業記憶内での自動的な連合から生じたものであることを示唆。
- STIで生じている特性と行為者の連合は、帰属や対人知覚のプロセスだけでなく、作業記憶内で活性化されている刺激が互いに連合しやすくなるというHastie(Srullの対人記憶の知見で言われていること)をも反映
- STIで見られている偶発的な連合プロセスは、特性推論と対人知覚プロセスの理解を深めるものでもある